

巻 頭 言

関西大学東アジア文化研究科紀要『東アジア文化交渉研究』の第13号をお届けする。本号は、表紙をご覧になれば分かるとおり、中谷伸生教授の古稀記念号でもある。

中谷教授は、1949年高知県にお生まれになったが、すぐに移居されたこともあってか、関西人としてお育ちになった。本学文学部に入学されたときには、史学・地理学科の学生であり、西洋史を専攻された。本学大学院に進学されるにあたって、美術史に転じられ、1981年に博士後期課程を終えられるとすぐに美術館に奉職され、以後10年にわたって三重県立美術館において学芸員として美術館の運営と研究に従事された。1992年に本学文学部哲学科美学美術史専修に助教授として着任され、爾来28年の永きにわたって、本学での教育と研究に邁進してこられた。

本誌掲載の研究業績一覧が物語るように、中谷先生は大学院時代から精力的・継続的に研究を遂行してこられた。6冊の単著、7冊の編著・監修、100篇を超える学術論文等はその結晶である。ただ、15年以上にわたって、多くの学外・学内の大型研究プロジェクトを中谷先生とともに遂行してきた私たち東アジア文化研究科のスタッフは、こうしたご業績が先生の日々のご研究から自然発生的に蓄積されてきたものだけではないことを承知している。2005～09年度私立大学研究高度化推進事業「東アジアにおける文化情報の発信と受容」に始まり、2007～11年度文部科学省グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」、2011～2015年度私立大学戦略的研究拠点形成支援事業「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用法の研究拠点形成」、そして2018年度から開始された私立大学研究ブランディング事業「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」に至るまで、私たちは「東アジア」を研究課題として一貫して掲げる研究プロジェクトを、外部資金を獲得して継続的に遂行してきた。もちろん「東アジア」は、学内スタッフ個々の研究領域を統合するための最大公約数的「解」であったわけだが、プロジェクトとしての課題追求はメンバー個々が行ってきた研究をそのまま放り込めば済むというものではなかった。多くのメンバーが、自らの研究領域を「東アジア」という場において意識的にシフトさせていくことを求められた。中谷先生は、そのシフトをあざやかに、そして軽やかに成し遂げられ、私たちにひとつのお手本を見せてくれたのである。

こうした大型プロジェクトは、研究だけでなく、運営という労多くして功少なき業務が不可欠だが、ここでも中谷先生は常に大きな力を発揮されてきた。外部資金獲得のたびに組み換えられる研究組織において、先生は常にコアメンバーの一人としてプロジェクトの遂行を支えてこられた。グローバルCOEプログラム申請の際

には、文学研究科に新専攻を設置し、そこに定員を割り振るという難事業を、文学研究科長としての確かなリーダーシップの下に実現され、それが2011年に東アジア文化研究科を開設する出発点となったことは記憶に新しい。またこうした大型プロジェクトの母体で常にありつづけた関西大学東西学術研究所を、松浦章先生の後をうけて3年半にわたって所長として主導され、現在の成果発信体制を確立されたことも、本学の東アジア研究を体制として安定させる上では大きな前進であった。

教育面、人材育成面でも、中谷先生への学生・院生の信頼は絶大で、ゼミの枠を超えて中谷先生を慕う者が多いのはこちらがうらやむほどである。先生の門下生で日本各地の美術館・博物館で勤務されている方は本当に沢山おられるが、これは中谷先生について行けば大丈夫という信頼を、先生がつねに真摯に応えてこられた結果に他ならないだろう。そしてその信頼は、学生・院生だけでなく、私たち教員も共有するものであった。さまざまな問題に直面したとき、私たちが何よりも頼りにしたのは、中谷先生の、明解にして情理を尽くしたアドバイスであった。

その中谷先生が、本年度をもって本研究科の専任を離れられることは、先生に頼ってきた私たちにとって「寂しい」ではすまされない事態である。3年前に松浦章先生がご退職されるときにも、同じような心細さを感じたものだが、しかし今はなによりも中谷伸生先生のこれまでのご尽力に厚く感謝申し上げ、今後もますますのご清栄をお祈りするとともに、先生ご自身も founding member である本研究科の今後の発展充実に決意して、巻頭言ならぬ贈る言葉としたい。

2020年3月

関西大学大学院東アジア文化副研究科長

藤 田 高 夫